







Illustrated by Satoshi Urushihara



Illustrated by Satoshi Urushihara



綾波俱樂部・式

# INDEX

: 黒の覚醒:

: THE THIRD:

: あとがき:

: インフォメーション:

: おくづけ:



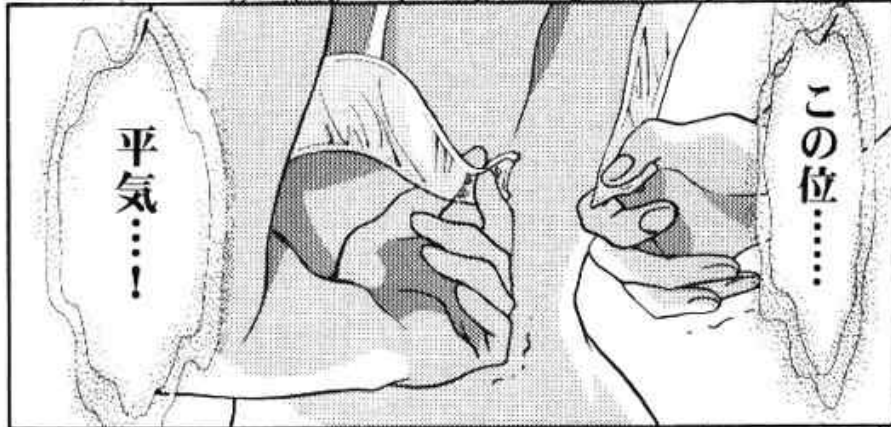
# 黒の覚醒





150555...

その為なら...



平気...!

この位...



鈴原...君!

会いたい...  
もう一度!



どうやら君が  
処女というのも  
まんざら嘘じゃ  
なさそうだ!

クックク...いいねえ  
その恥じらい!



だがそうやって  
手で隠しちゃ  
“ストリップ”とは  
言えないな!





会わせ…て

お願い  
だから！

お…お願い  
……

君のその  
小振りの白い  
乳房を！

とつとと晒して  
ほしいなア！

鈴原君に！

会わせてツ  
!!!



君がこの僕の  
要求を……

受け入れるのが  
“先”だけどね！

!?



フフフ…会わせ  
てやるとも！

ただし……

逆らえば  
勿論…!

この話は  
ナシだ!

こんな風に“彼”に  
オツパイをのみしだ  
いてもらいたいなら…

今はこの僕に身を  
委ねるしかないだろ?

タニヲ

ウツ…ウウ



フフフ…  
最高だ  
このしっとり  
吸いつくような  
肌!

十四歳の  
少女の乳房  
を弄ぶのが  
こんなに心地  
いいとは…ね



アッアアア…  
やめ…て!


い…痛ア!






お…お願い！  
乱暴は……

…しない  
で！



フフ…すべては  
君しだいさ！

僕の言う通りに  
していれば手荒な  
マネはしないさ！



いよいよ  
最後の一枚  
を脱いで  
もらおうかな！

さて  
それじゃあ  
……



.....



.....  
いやッ！  
.....  
もうこれ以上は  
.....お願い！



ン...おいおいそれは  
随分と薄情じゃない  
か？



フフ...君の  
あそこを隠す  
こんな薄っぺらな  
布切れが.....

彼の“命”より  
大事だという  
のかい...？



フフ...まあ  
仕方ない  
か!

“処女”なら  
無理からぬ  
事...

逡巡する気持ち  
も判らないでも  
ない!



ンア...アツア  
い...嫌ッ

やめてッ



そのままじっと  
してゐるんだ  
いいね...?

こうして君の  
嗚咽を聞きな  
がら剥ぎ取る  
のも一興だ...!



フフフ…



ヒイ…アアア

!!





ウツ…ウ…



おおつと…  
動くなよ！

もし抵抗すれば  
彼とは二度と会え  
なくなるんだからね！



鈴原…君!!



フフ…こいつは  
たまらないなア  
~~~~~!

つみとつてしま  
たいぐらい愛らし  
性器が顔を出し  
たぞ~~~~~!





実に初々  
しい！  
ういいうい

このうつつすらと  
生い茂る痴毛  
……そして



その“先”にある  
このひっそりと閉ざ  
された陰核の門を……



今……初めてこの僕の  
男性の指が触れ  
揺さぶっているんだね！

“初モノ”  
特有の芳しい  
香りが立ち  
こめてくるよう  
だ…!

ノ  
チヤ

クツクク…  
臭うなア  
〜!!

や…やめて  
嫌ア!!

そ…そんなトコ…  
舐めないでツ!!

おいおい…  
何度も  
同じ事  
言わすな  
よッ!

逆らえば  
“鈴原は死ぬ”

いい加減  
頭に叩き  
込めよなアッ!!

お前は  
ただ黙って  
この僕を

愉<sup>たの</sup>しませて  
くれりやいん  
だよ!

へへ…今は気持ち  
悪くてもその内に

こいつがたまら  
ねえ快樂になる  
んだぜエ〜!!

ヤアアアア!!





さあ…次は  
同じように…

僕のを可愛がって  
もらおうかな!





どうした？  
時間が惜しく  
ないのかい？

とつとと済ませて  
早く“彼”を助けに  
行こうじゃないか！



.....



フフ…君の裸を  
見てこうなって  
しまった以上…

どうにも欲望を  
吐き出さないと  
僕も収まらない  
のでね！

ホラッ！

手間をかけ  
さすなよ！！



ア……アアア



しゃぶりつく  
んだよ!

「フェラ」くらい  
どうって事  
ないだろ!



これが……成人男性  
の性器!?


なんて歪で……  
グロテスク!



幼い弟達の  
それとはまるで  
別物……

生き物のように  
猛り脈打って  
いる!?






もっと積極的に  
自分からしゃぶり  
つくんだよッ!

そんなんじゃ  
いつまで経っても

終わらねえぞ!



鈴原…君  
待ってて!必ず…

必ず助けに  
…行くから!





ン…  
いいぞオ!

その調子  
で続ける!



フフ…さては  
相当淫乱の  
気があるな!

とても素人  
とは思えない  
いやらしい  
手つきだよ!



私…どんな事でも  
我慢するよ!

鈴原君に会う  
ためだもん!



ピッチを

上げるかア!



いいだろう  
そろそろ…



全部…飲む  
んだぞ!!

いいかア  
はき出すなよ!



ゲホッ

フウ…エエッ  
~~~~ッ!

オエエッエエ







こんな  
に  
床を汚し  
て…

悪いコ  
だ…！



も…もう  
嫌アアア

誰か  
助けてエ！！



“飲精”すら  
満足に出来な  
いようじゃ…

“ペナルティ”を  
課すしかなさ  
そうだな！



ハアツハハ

誰も助けに  
なんか来ないよ!

教員には  
人払いを  
命じておいた  
からねエ!



それじゃ  
.....

や...やめて!  
お願い!

尻穴<sup>アナル</sup>を  
いただけようか!



いちいち  
うるさいよ！

“処女”を散らさ  
れるよりよっぽど  
マシだろうが！



こつちの  
肛門で我慢  
してやろうって  
言ってたんだ！

少しは愉しま  
せろよッ！！





なんておぞましい  
嫌な感覚……!

早く過ぎてッ!  
忘れてしまいたい

私はただ鈴原君に  
会いたいただけなのに!!



はい  
挿入ってくる!

汚らわしい  
異物感が……

痛ア!

この男の体温と一緒に  
おしりから伝わって……



この陵辱に  
耐えないと


それは  
叶わないッ!!




夢の尻穴だよ!  
君の尻穴を……

こうして犯せ  
るなんてねエ!

ハアツハハ  
最高だ!



ハツハハそれにしても…実ははしたない格好だねえ〜！



見てごらん！  
僕の陰茎を

ズツポリ啜え込んで離さないよツ！

なんていやらしい尻穴だツ！！





The Bird



自分を「三人目」と言う綾波レイ。  
彼女は人の「好き」という感情が判らないらしい…





僕は何気にそんな綾波と意識して「手」を繋ぐようにしていた。

綾波は「そうしたいならすれば？」といつものように振る舞うだけで他人の気持ちには干渉しない。



それはそういう感情に「興味が無いから」だと僕は理解していた。



それでも僕は違和感のある綾波レイとの「恋人氣分」に少し酔いしれたかった。

その内に僕は行為をエスカレートさせていく…





ともな  
心の伴わない「虚無の絆」…



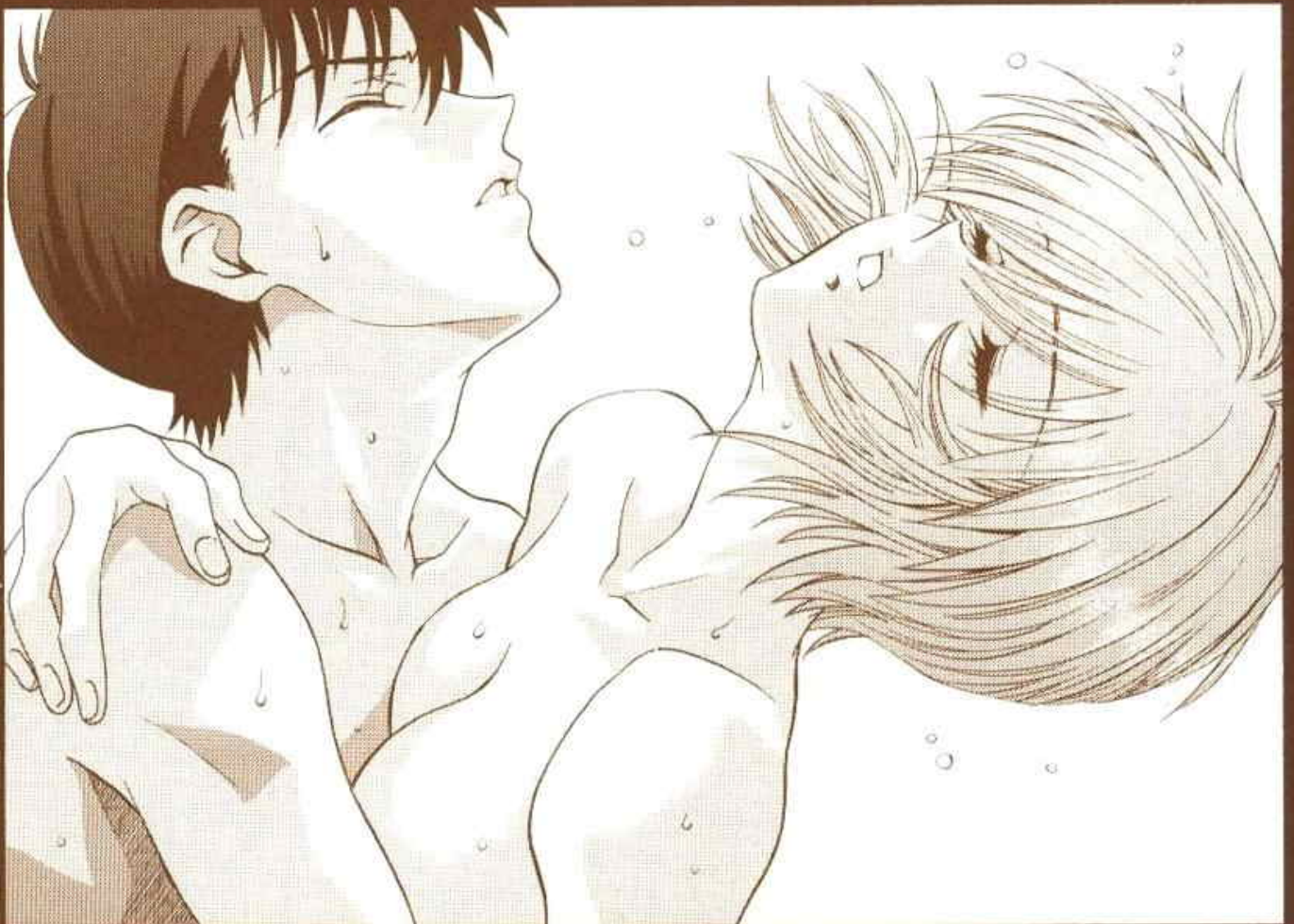








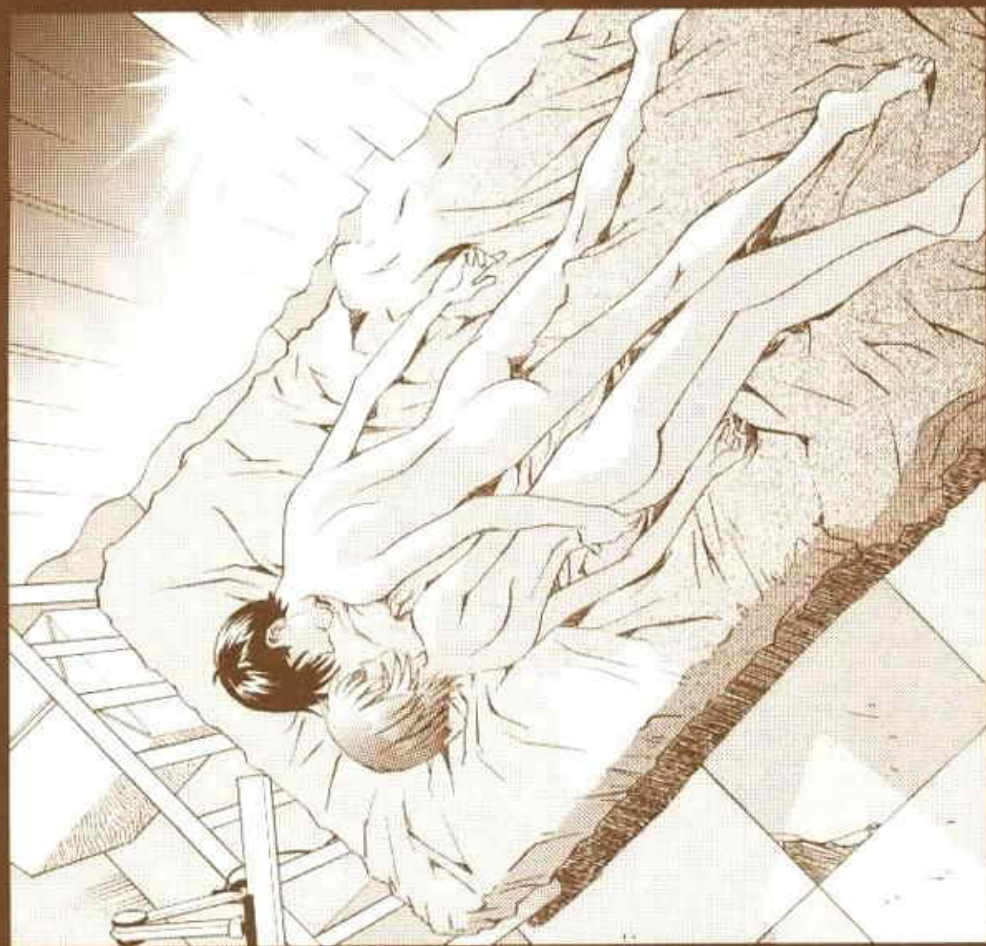
それでも「いとおしさ」はこみあげてくる……







まずは「形」だけでいいと自分に言い聞かせながら綾波と体を重ねる日々。

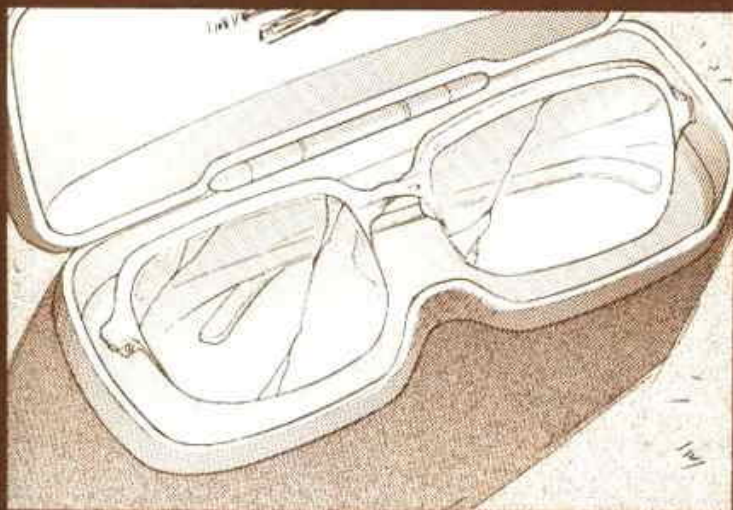


「気持ちいい？」

そう尋ねる彼女に照れくさそうに頷くとその一瞬だけ  
綾波は「心を許したような」笑みを返してくれる。



それは綾波が全幅の信頼を寄せている<sup>とうさん</sup>碇司令以外では  
その時の僕だけが見れる特別な表情に違いなかった。





「他人」では届かない綾波レイに触れている自分が誇らしく、それはたとえ未来が困難な道でも共に歩いて行こうと決心していた僕の自信の源でもあり、いとおしさの根幹を成すものだった。

でも綾波レイは月日の流れさえ無視するようにこう言い放つ。  
「私…判らない」



やがて綾波は僕と手を繋いで歩く事さえしなくなった。  
二人の間でしっくりいかない「違和感」だけが大き<sup>へだ</sup>くざわめき隔たりが  
拡がっていく…



ある日、ネルフで僕は自分の知らない「部屋」の入口を見つける。



以前、綾波レイの「出生の秘密」を赤木博士に教えられた  
あの部屋に入る時と同じような胸騒ぎを憶えながらも僕は  
奥へと歩を進めた。





そこには我が目を疑う光景が広がっていた。



あの綾波レイが娼婦さながらの格好で見知らぬ軍の高官らしき男を  
誘い情事に勤しんでいた…



僕のは彼女に釘付けになった。  
綾波は親しげに男に尋ねる「気持ちいい？」



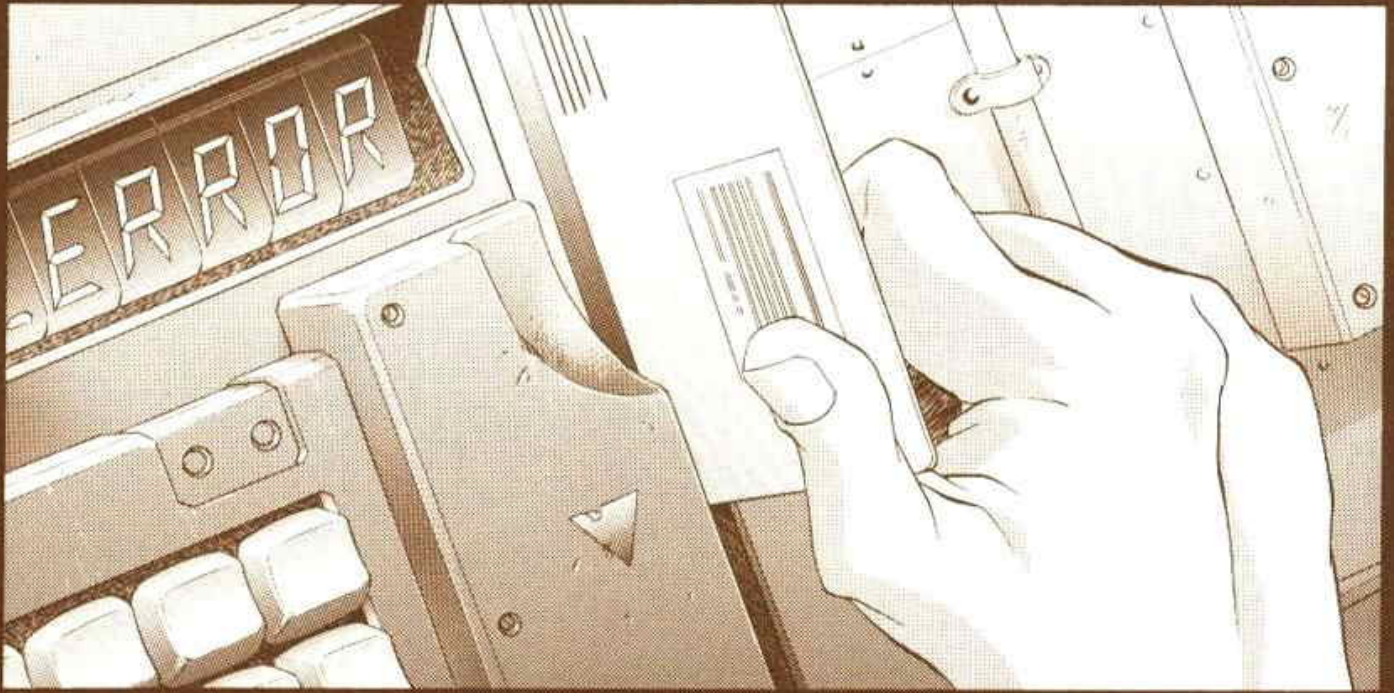
つぶさに観察すると彼女の行為や仕草は僕に接する時のそれと全く変わらない形でその知らない男に注がれている。  
「心を許したような」あの笑みまで……



僕は足の震えを止める事もできず暫くその場に佇んでいた。

トップ・シークレット

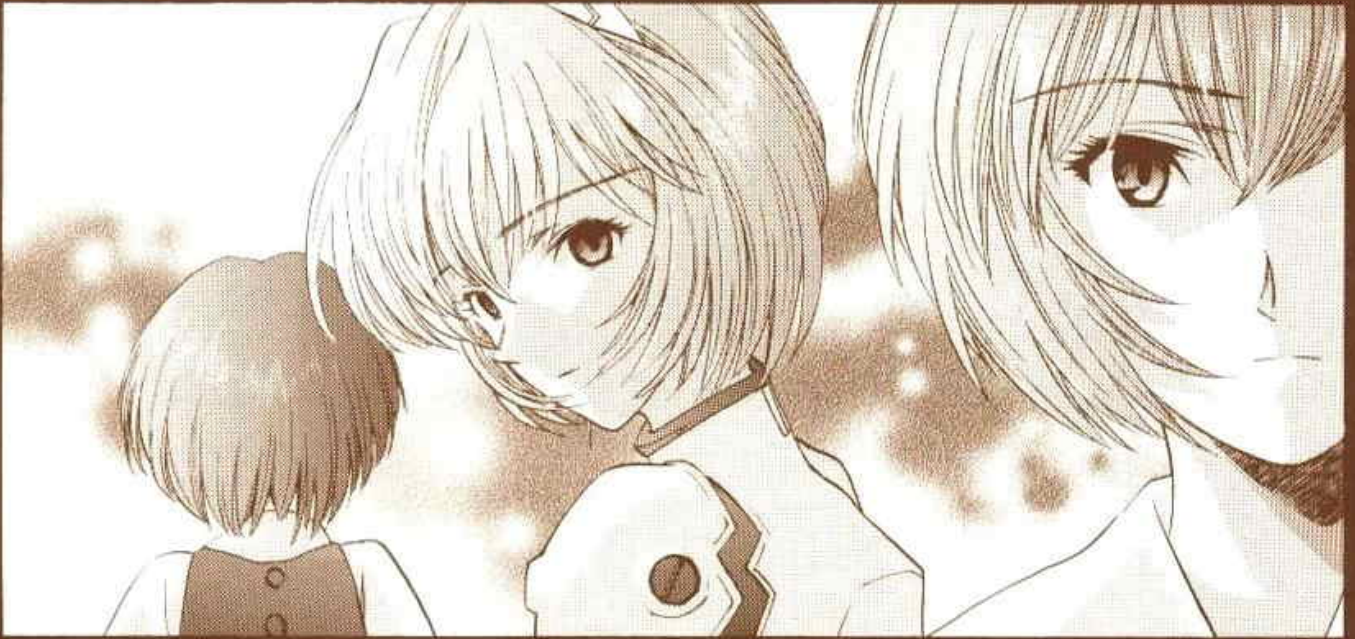
どうやらその部屋での行為はネルフの極秘機密らしく  
やがて僕の通行証では通れなくなった。



碓<sup>とうさん</sup>司令や赤木<sup>リツコさん</sup>博士と当事者達だけの他人には伺<sup>うかが</sup>い知れない密約。  
自分も彼女の近しい人間のつもりだったのに…  
一人、「蚊帳<sup>かや</sup>の外<sup>そと</sup>」に置かれ遣<sup>や</sup>る瀬<sup>せ</sup>ない気持ちと憤りを抑えられない。

それならせめて僕のわからない所でやってくれ。  
最初に通行証<sup>カード</sup>を渡しておいて通れる所で「秘密」を作るな。

「ねえ……綾波、僕の存在ってなに？」



一人目の綾波レイ。それは僕が知らない過去の君  
二人目の綾波レイ。それは僕と出会ったファーストチルドレン  
三人目の綾波レイ。心が芽ばえる時を待ち僕と共に過ごしてくれた君

「すべての綾波レイ」を受け止めたつもりで僕が待ち続けたその場所は  
特別な場所ではなく簡単に誰でも手の届く場所だったの……？





僕は今日もその場所を覗こうと必死だ。



何をしているの………碓くん？







「あ…綾波ッ！どうして!？」  
綾波を尾行し、この部屋に侵入していた僕は  
目の前に現れた「もう一人」の綾波に驚愕する。



それは「私」じゃない。  
碇くんには「私」に見えるの…？

……私の姿をしていれば「私」なの？



「じゃあ碇くんはもう私を見つけられないわ…」



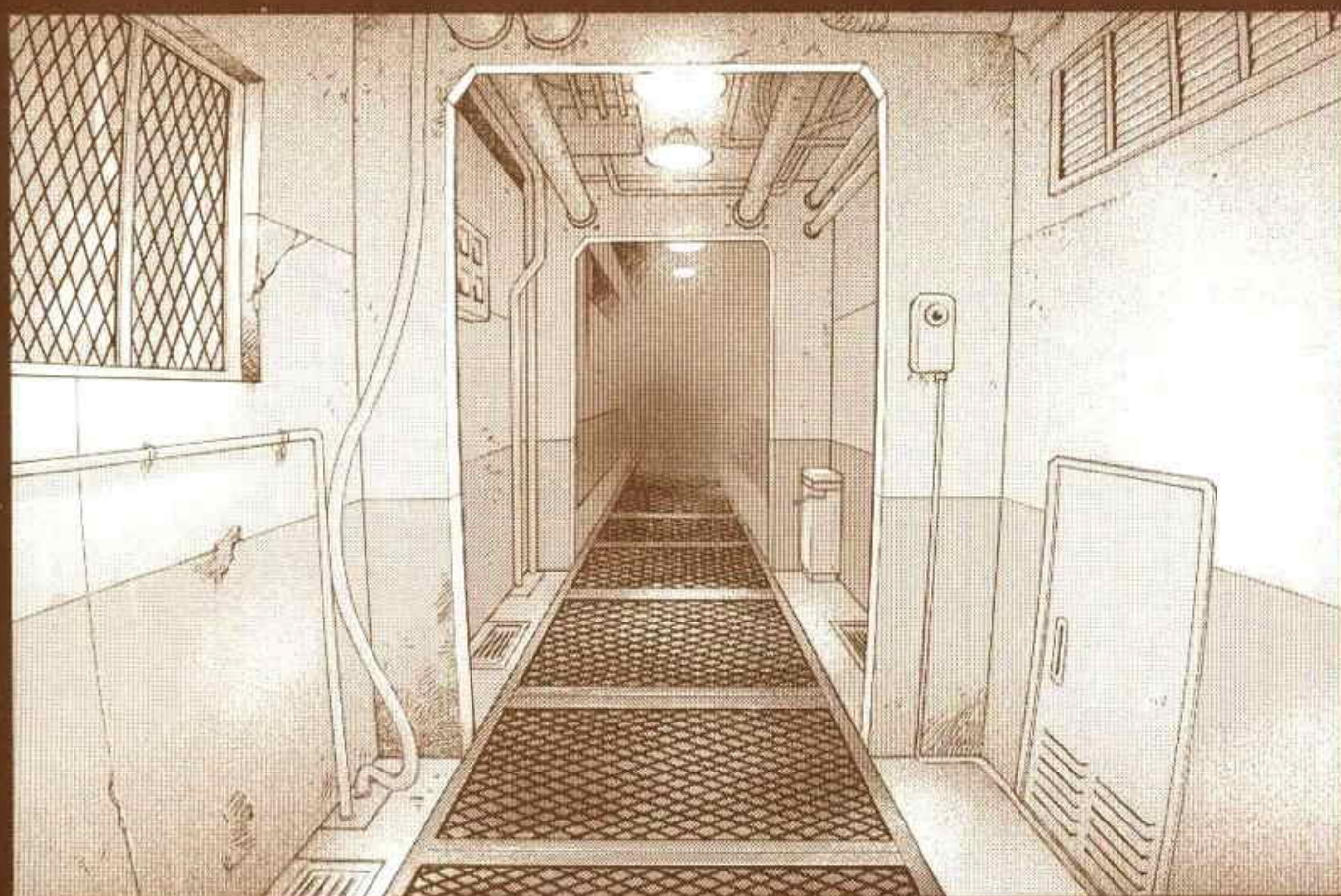


綾波を追わなきゃ……！

その通路を曲がってしまうともう二度と追いつけない気がして  
僕は焦りと後悔と未練を引きずりながら必死に走った。

見失わないように……本当に必死になって走った。

「綾波ッ!!」



静寂が支配するその通路に僕の足音だけが空しく響き渡っていた。

## あとがき

エヴァの放映もブームも過ぎ去って久しい近年、今ゲームや各メディアに再び新しい動きの気配もあり同人世界でも衰えを知らない根強い人気を感じますが決定打となりうる映像の「続編」って結局の所どうなのでしょう？  
製作されるんでしょうかね…なんて考えても仕方ありませんね。ヒット作の続編って「作られるかも知れない」って期待を寄せている間の方が色々想像できて有意義で楽しい気がします。

「綾波倶楽部・貳」いかがだったでしょうか。  
秋に臨時発行した増刊号「脱」を網羅する形の追加筆版ですが限られた時間の中「黒の覚醒」の続きをスタッフ一丸となり仕上げました。  
この漫画は次号「綾波倶楽部・参」にて完結の予定ですが綾波倶楽部自体はそれ以降も続けていきたいと思っています。  
前述の“続編を期待し膨らませる想像”…そんな妄想を作品に反映できる場って同人誌しかありませんからね(笑)

最後になりましたがご多忙の中、今回も素晴らしいピンナップを描き上げて下さったうし原智志先生、不規則なローテーションにも関わらず商業誌と同人誌の平行作業にいつもつきあって下さるアシスタント並びに編集スタッフの皆さん、そしてこの本を支持して下さる全ての方々に深く感謝の意を捧げます。  
皆様にとって来年も素晴らしい一年でありますように。

2003年12月      かわらじま晃